67　オットー・モーニッケの教えた最新の西洋医学

相川　忠臣
活水女子大学

モーニッケの日本人の医療の記録によれば，1849年8月14日から1850年1月28日までに長崎で381名の子供に種痘を自ずから施した．彼の痘苗は子供の腕から腕へと植え継がれて東漸し，関西，関東に伝播された．彼の1850年春の江戸参府は牛痘普及を確認する旅となった．レフィソーンの日記によると，3月18日夜大坂の宿に，次に泊まる都の宿の主人が15歳の息子を連れて訪れた．主人は，息子は牛痘の接種を受けたばかりだと告げた．モーニッケによれば，3月19日までに大坂で870人，3月25日までに都で2,460人に接種された．江戸では4月10日に少なくとも500人の子供たちが毎日接種され，玄朴（伊東）とSan-Seiの二人だけで毎週約200人の子供に接種していた．さらに長門，越前，水戸，加賀，仙台など日本各地の藩，九州の肥前，筑前，大村，島原，肥後の各藩そして薩摩藩から琉球列島にまで広まっていった．幕府がひそかに鼓舞し支援はしても，種痘を一般的な衛生方策に格上げするための何の手立てもしなかったにもかかわらず，日本国中に急速に種痘が普及するという大成果を挙げたことにモーニッケは大変驚いている．

楢林宗建の『磨尼欵對談録』には失敗した1848年の牛痘の実施状況以外に，モーニッケの治療例，ストリキニーネやモルヒネの効用が書かれている．クロロホルム麻酔について次のように宗建に教えている．《コロロフヲルム　此薬は千八百四十七年の頃ドイツ国に於てアンデルセンと云（へ）る者発明し，人をして麻痺せしめ以て手術を施す一奇薬とす．其法ブリキ盤を以て製したる鑵状の器械に之を滴入し其器械を口に接し呼吸に随（い）て薬気を吸入せしむるときは其人漸く麻痺を軀の然れども人事不省には至る事なし．之を度として手術を施すときは患者は豪も痛みを知ることなし．もし手術を施したる後，麻痺復せざる者はコーヒー湯あるいは薬湯を服せしむるべし．此薬はchlorをーーーーの———に合製したる者なり．用法は大人に三，四滴，より六，七滴まで一片の海綿に點滴し，之を器械の内に入れ，其薬気を吸引せしむ．小児には用ゆる勿れ.》モーニッケに痘苗を送ったWillem Boschの医務局長は1848年前半には早くもスラバヤのSimpang病院でクロロホルム麻酔とエーテル麻酔を用いた手術が行われたことを報告している．エーテル麻酔はDr. Wassinkによって行われた．クロロホルムにより患者を半意識の，ほとんど感覚のない状態にして下肢の切断手術に最初に成功したのは，モーニッケと親交があり，彼の見つけた魚に命名した著名な博物学者P. Bleekerであった．モーニッケが宗建にクロロホルム麻酔をあたかも経験したかのように具体的に説明しているのはこのような背景による．

長崎大学医学部にはモーニッケがもたらした日本最古の聴診器（聴胸器）がある．吉雄圭齋が寄贈したものであり，レンネックが初期に作った筒型の聴診器である．原爆で亡くなられた角尾　晋長崎医科大学長が植物学者に検討させて日本のオニクルミではなくヨーロッパのペルシャクルミで作られていることを確かめられ，ヨーロッパ由来であることがわかった．杉田成卿は1850年に牛痘略説，聴胸器用法略説と亜的耳吸法（エーテル麻酔法）試説からなる『済生備考』を著した．牛痘略説とエーテル吸法は翻訳によるもので，聴胸器用法はモーニッケの記する所に依拠している．まさにモーニッケのもたらした最新の西洋医学に衝撃を受けて書かれたのである．品川梅村（藤兵衛）がモーニッケの聴診器を模造したものを手に入れ，その使用法を書いているが，その図にある聴診器は長崎大学医学部にある聴診器とは違い，新しい型である．モーニッケは自分の使用する新しい聴診器は模造させ，古い型のものを圭齋に与えたのであろう．